四、明治二十一年石川県衛生一覧表について　石川県金沢市　橋本　和夫
五、北陸に於ける医の郵便印　京都府長岡京市　石原　理年
六、鳥巣道人謙斎著「医療手引草」について　石川県金沢市　山田　祥二
七、金沢医学館卒業生について　石川県金沢市　寺畑　喜朔
八、西尾幾治『看護婦養成の実際』（一九三九）について　大阪府豊中市　長門谷洋治

〈特別講演〉
北陸の漢方典籍―医史的考察　石川県金沢市　多留　淳文

例会記録

六月例会　平成四年六月二十七日（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室
一　足立長雋訳「産科礎」の原本　蔵方　宏昌
一　ビデオ鑑賞「テレビノンフィクション鷗外の敗北」
KBC九州朝日放送制作

九月例会　平成四年九月二十六日（土）
順天堂大学医学部九号館三番教室
一　ルイ・パストゥールの九月　大村　敏郎
一　中国本草の受容史　真柳　誠

紹　介

新村拓著『老いと看取りの社会史』

著者は本学会々員であるが、早稲田大学大学院を出た歴史学者である。既に『日本医療社会史の研究』『死と病と看護の社会史』等の単行本を刊行して世に問うている。今回のこの書もこれまでの研究を踏まえて、近年わが国で大きな問題となりつつある「老いと看取り」を社会史的観点から取り上げたものである。月刊誌「総合社会保障」に一年間連載したものをベースとしてまとめたといわれる。

この本の章立ては次の通りである。第一章、老いを迎える年齢、第二章、前近代社会における老いの評価、第三章、老いと病、第四章、老人介護を支える孝の論理と仏罰、第五章、老いの生活規範、第六章、近世の医書『病家須知』にみる看護、第七章、近代の家庭看護と斉家論。

まず通読した感想を述べさせて頂くと、内容が甚だ盛り沢山で読むのに骨が折れる感じである。古記録、歴史書、文学書、医書等から博引旁証の資料が次から次へと出て来て、著者の言いたいことがどの辺にあるのかわかり難い憾みがある。著者は「あとがき」では次のように述べている。

「古代から現代に至る老い観と死生観の変遷を、老いを看取る人、看取られる人の双方の立場から辿ることを試みたが、

浅学菲才の故に明瞭な輪郭を描くことはできなかった。」

この「あとがき」にも述べられているように、本書では記録に残った老い観や看取り観が主として記述されていて、歴史上の老いの実態や看取りの実態にあまり迫っていない。「老いと看取りの社会史」であれば、老いと看とりの実態を知りたいと思うのだが、述べられているのはどちらかというと老いと看取りについての考え方の歴史であることに物足りなさを感じる。

評者のこういう感覚から見ると、この本の中で引用されている『医心方』『啓迪集』『養生訓』『病家須知』等の医書の内容よりも、『源氏物語』『今昔物語』等に出て来る「老い」や「看取り」の様子により興味を引かれるのである。これらの物語や説話は作り話ではあるが、医書よりは当時の世相の実態を反映しているところがあるのではないかと思う。

著者が何度か引用している藤原定家の『明月記』は日記であるから物語よりも資料的価値はさらに高い。著者はこの所は引用していないが、『明月記』の最初の方にある定家の父俊成の臨終の模様は看取りの記録としてまことにリアルで興味深いものである。「死ぬべくおぼゆ（死にそうに思う）」という俊成の生の言葉も記されていて印象深い。しかしこれを詳しく紹介するのは小稿の目的ではないので、興味ある方は『明月記』をひもとかれると良いと思う。

以上、遠慮のないことを述べさせて頂いたが、もとよりこれだけの著書を書き上げるのは並大抵のことではない。史料、記録、研究書の類に広く目を通し、著者にとっては専門外の医学の領域の資料についても妥当な判断をしてまとめているのは敬服に値する。また前に述べたこの本の物足りなさは同じ著者の『死と病と看護の社会史』によって補うべきかも知れない。いずれにせよ、今後この方面において何かを調べまたは何かを書こうとする者にとって本書は必見の文献であることは間違いない。

（中村　昭）

〔法政大学出版局・東京都千代田区富士見二―一七―一　電話〇三―三二三七―七三四一、一九九一年、四六判・二五一頁・定価二四〇〇円〕

岩田誠著『パリ医学散歩』

本書は、西暦六五〇年に建てられたオテル・ディユー病院に始まり、十九世紀後半に到るまでの主にパリを中心とした医学的記念碑及び病院について、その歴史、活動状況が二十五編にわたって記載され、興味深いことは、それぞれ登場する先駆者の一人一人が生きた姿として著者の巧みな文章によって一つの魅力あるドキュメントとして書かれている。著者は現在東大医学部助教授（神経内科）として活躍中であるが、若き日パリに留学、その経験を基に市内随所に散見される医学的記念碑を一つ一つ丹念に訪ねその印象を語り、文献を駆使して先駆者の足跡をたどり、本書はその人間像を浮き彫り